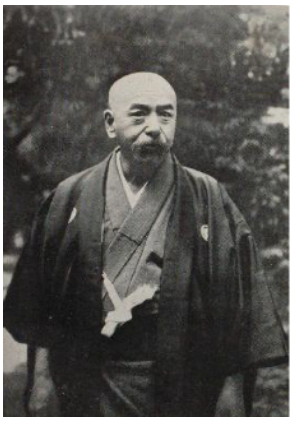
粘菌研究から宇宙生物学へ

南方マンダラのコスモロジー

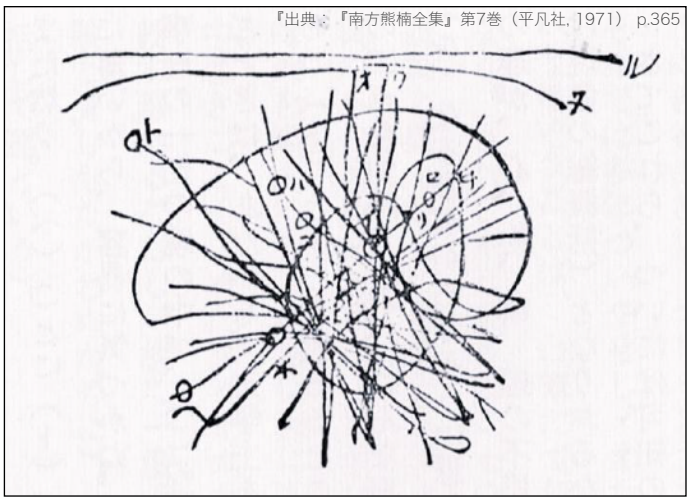
Cosmology of Minakata's Mandala



『南方熊楠全集』第1巻 （乾元社1951）

南方マンダラは，南方熊楠（1867-1941）の世界観・宇宙観を示したものと考えられています．熊楠は変形菌（粘菌）という生き物に生命の原初形態を見ていました．同時に彼は大乗仏教には科学と矛盾することのない，真理探求の道筋が説かれていることを見出します．「草木国土悉皆成仏」は，自然界に存在するものは全て大日如来，すなわち宇宙のエネルギーが姿を変えたものであることを意味しています．また学問（科学）は真理を探求する営みですが，種としての人間の認識には自ずと限界があり，その先には分別を超えた世界が広がっています．熊楠はこのように大乗仏教の存在論・認識論を自身の学問の哲学としました．それは朋友土宜法龍（真言宗僧侶）宛ての書簡にある次の言葉に表れています．「大乗は望みあり．何となれば，大日に帰して，無尽無究の大宇宙の大宇宙のまだ大宇宙を包蔵する大宇宙を，たとえば顕微鏡一台買うてだに一生見て楽しむところ尽きず，そのごとく楽しむところ尽きざればなり．」（明治三十六年七月十八日付土宜法龍宛書簡）

● 南方マンダラ



『出典：『南方熊楠全集』第7巻（平凡社, 1971） p.365

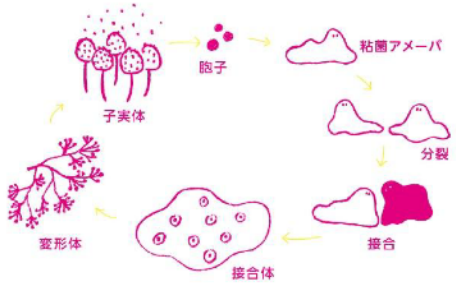
いわゆる「南方マンダラ」として知られるこの図は，熊楠の認識論を表したものと考えられます．現象世界は複雑に入り組んでいますが，そこには必ず事理（因果・縁起）があり，それを解き明かそうとする試みが学問であると熊楠は考えました．

複雑に絡み合った因果関係や偶然性を孕んだ事象も，図中（イ）のような事理の結節点に立てば見通しが良くなります（熊楠はこれを「萃点」と呼びました）．科学技術の進歩は，生来人間に備わる感覚器官では知覚できなかったものを知覚可能にし，我々の認識の幅（ヌ）を広げてくれます．時には天才的なひらめきによって革新的な発見がなされ，人知の限界（ル）はパラダイムシフトを繰り返しながら押し広げられていきます．しかし依然として種としての人間の認識には限界があり，その外側には不可知の世界が厳然と広がっていることを熊楠は観想していました．

● 粘菌

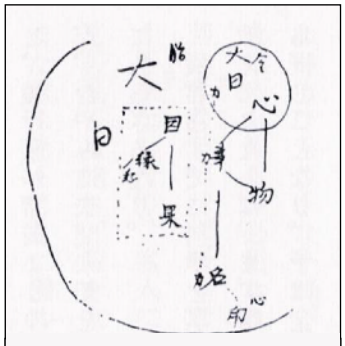
熊楠が研究した粘菌は，動物とも植物とも区別のつかない不思議な生態を持つ生き物で，熊楠はそこに生命の原初形態を見ていました．それは『古事記』の国生み神話に語られるアシカビ（葦牙=葦の芽．「牙る（カビる）」は「黴」の語源と目される）を彷彿させます．

出典：紀南Good（https://good.tetau.jp/article/4/）



天地初発之時，於高天原成神名，天之御中主神．次，高御産巣日神．次，神産巣日神．此三柱神者，並独神成坐而，隠身也．次，国稚如浮脂而，久羅下那州多陀用弊流之時，如葦牙因萌騰之物而成神名，宇摩志阿斯訶備比古遲神．（天地の始めには，ブヨブヨと脂のようなものが漂うドロドロした水の中から，アシカビのように生えてきたものがあり，その神の名をウマシアシカビヒコヂと呼んだ．）

● 南方第２マンダラ



出典：『南方熊楠全集』第7巻（平凡社,1971）p.390

南方マンダラには「第2マンダラ」と呼ばれるものが存在します（松居竜五氏命名）．冒頭のいわゆる「南方マンダラ」が認識論であるのに対して，こちらは存在論と言えるでしょう．図では仏教で言う「胎蔵界」とそこに含まれる形で「金剛界」が示され，金剛界大日の方から「心」と「物」が生まれ，それらの相互作用として「事」が生じる様子が示されています．横に書かれた「力」はこれらの相互作用を引き起こすエネルギーであり，胎蔵大日の側には様々な事物を生じさせる法則として「因果」と「縁起」が記されています．

（大阪工業大学 井村誠）